若者の方言にみる言語変化－群馬県の新方言を例に－

佐　藤　髙　司

キーワード　新方言　言語変化　東京型　地方型　方言的特徴の継承

要旨

本論文では、群馬県における新方言の使用状況の推移をいくつかの具体例から示し、新方言には日本語の言語変化の典型を認めることができること、地方型の新方言の中には方言的特徴を継承する言語変化が認められることを述べる。

新方言とは、若い世代に向けて使用者が増えている、共通語とは認められない、地元でも方言扱いされる（くだけた場面・高くない文体で使用される）という 3 つの条件を満たす語形を指す。新方言は、共通語化が進む日本語にあって若い世代に新たに方言が生まれている証拠であり、全国各地で確認されている。また、新方言には東京型と地方型とがある。東京型とは東京でも地方（群馬県）でも新方言の傾向を示す語形であり、地方型とは東京では使用されず地方（群馬県）でのみ新方言の傾向を示す語形をいう。

東京型の新方言としてチガイとミタクをとりあげる。チガイは、動詞「違う」の意味内容が形容詞の範疇に近いことからその語幹を形容詞のように活用させることから生じた新方言である。チガカッタ、チガクナッタという連用形から始まりチゲーという終止形の発生に至る使用状況の推移は、新しい形容詞の誕生を示すと同時に、品詞・活用体系を整えようとする言語変化、並びに明晰化に向かう言語変化とみることができる。ミタクは、形容動詞「みたいだ」の語幹「みたい」を形容詞化した新方言である。群馬県内では東部地域から使用が始まり、西部・中部地域に既存のミチョーニ・ミトーニを凌ぐ勢いで広まっている。この動きは品詞・活用体系を整えようとする言語変化、並びに言葉を単純化しようとする変化と捉えることができる。両者は東京の若年層にも普及が認められ東京型の新方言と判断でき、全国的に普及しつつある。

地方型の新方言ではンベーをとりあげる。ンベーは、未然形接続のベーが接続の単純化により終止形接続となり、ル語尾を撥音化する発音の簡略化により生じた。この撥音化は群馬方言の音声的特徴を受け継ぐ変化と考えられる。群馬県内で独自に発生したと考えられ東京では使用されず、地方型の新方言と判断できる。

三例が示すように新方言には日本語の言語変化の典型を認めることができる。また、ンベーが示すように地方型の新方言の中にはその地方独自の方言的特徴を継承する言語変化が認められる。地方では日本語の言語変化の萌芽を含みつつ、確実にその地方の方言的特徴を継承する言語変化があるのである。

１　はじめに

本論文では、群馬県の若年層で使用が認められる「新しい方言」（以下、「新方言」と呼ぶ。「新方言」については、「３　若者の方言－新方言－」で詳説する。）の使用状況を過去の言語調査のデータから示し、それらの使用状況を細かく考察することにより、新方言の使用には日本語の言語変化の典型やその地方独自の方言的特徴を継承する言語変化が認められることを述べる。若年層の言語使用から日本語の言語変化を考えようとするものであり、必要に応じて、東京、関東、東北等の状況についても文献を引用して触れる。

本論文は、平成 18 年度群馬県立女子大学「群馬のことばと文化」における筆者の講義『群馬の新しい「方言」－若者の「方言」にみる言語変化』の内容を踏まえてまとめたものである。

２　調査と研究成果

筆者は、群馬県を中心とする北関東の西部において新方言に関する調査を過去に２回行っている。

第１回調査は、1981 年に行い佐藤 1982 に報告した。そこでは全国共通語に近いとされる関東方言においても新方言が生まれつつあることを、群馬県を中心とする北関東の西部の高校 18 校の生徒とその保護者のアンケート調査結果から実証した。この調査は関東における新方言に関する調査として先駆的であった。

第２回調査は 1992 年に行い、佐藤 1993a で報告した。第１回調査と第２回調査の比較から、新方言の伝播や使用に関して次のようないくつかの傾向を報告した。

①新方言には、地方全域に急速に広まる東京型と一地域に緩やかに広まる地方型とがある。

②東京型は地方の中心都市から全域に、地方型は生活鉄道沿いに広まる傾向がある。

③新方言の使用率の安定は女性若年層によって左右される。

また、筆者は佐藤 1993a をもとに、佐藤 1993b、佐藤 1994、佐藤 1996a、佐藤 1996b、佐藤 1997a の論文を発表している。

３ 若者の方言－新方言－

井上 1997 によると、「新方言」とは「若い世代に向けて使用者が多くなりつつある非共通語形で、使用者自身も方言扱いしているもの」である。「若い世代に向けて使用者が多くなりつつある」ということは、方言が消えつつあるという現在の流れに反するものという着目である。年齢差に着眼し、用語「新方言」の「新」に関わる条件である。「非共通語形」とは、辞書、文法書にはない、共通語としては認められない形のことであり、用語「新方言」の「方言」に関わる条件である。「使用者も方言扱いしている」ということは、場面差・文体差に着目するということで、非標準語形と同様に用語「新方言」の「方言」に関わる条件である。共通語化ではない言語変化であることを示している。

井上 1997 では、新方言と関連する様々な術語が出現したことから、新方言を「言語変化の一典型」「進行中の言語変化」と位置づけている。使用者の年齢分布がある時期と数十年後にどう変化するかに注目すると、新方言は数十年後の若者も使うし、すでに若くなくなった人も使う（つまり使用者が全世代に広がる）のが特徴である。この意味で、流行語、スラング、若者ことば、キャンパスことばとは使用パターンが異なる。従って、新方言をみるときに将来的、継続的視点が必要となってくる。

また、新方言をみるときに、東京との関係を考慮することは欠かせない。東京で使用されているか否かによってその普及の程度に差があるのである。佐藤 1994 では、この伝播パターンの異なりに着目し、新方言を東京型と地方型とに分類した。東京型とは、東京でも地方（群馬県）でも新方言の傾向を示す語形である。地方型とは、東京では使用されずその地方（群馬県）でのみ新方言の傾向を示す語形をいう。東京型の新方言は地方全域に急速に広まる傾向があり、地方型は一地域に緩やかに広まる傾向がある。

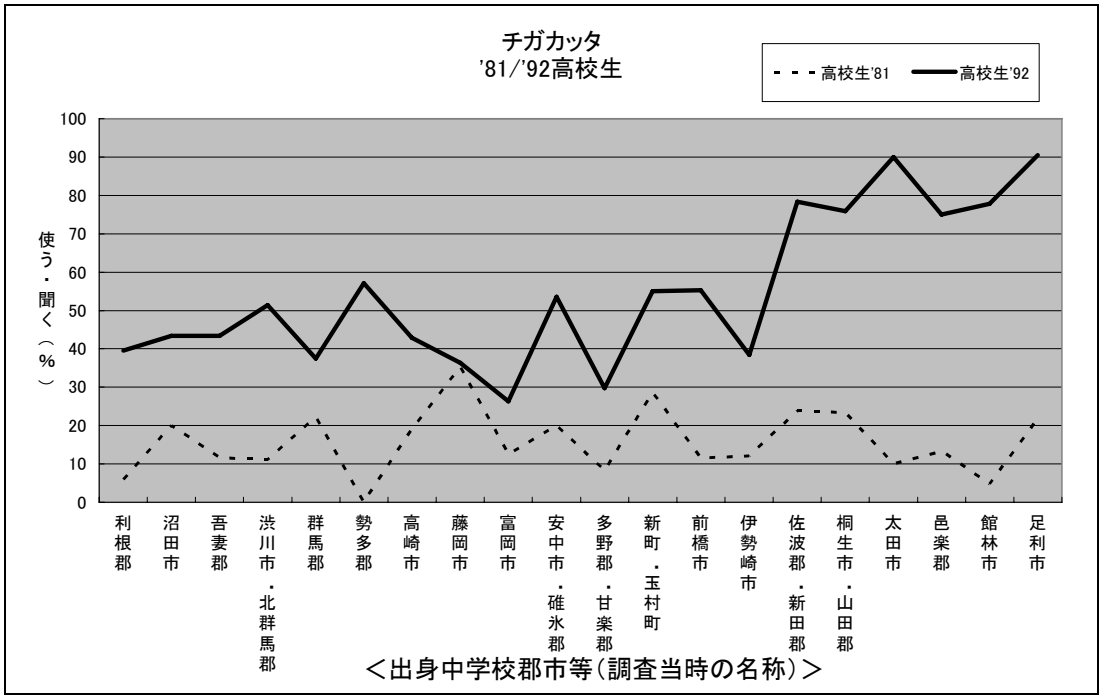
本論文では、群馬県内で確認されている東京型の新方言の例としてチガイとミタクを、地方型の新方言の例としてンベーをとりあげる。

4 チガイ

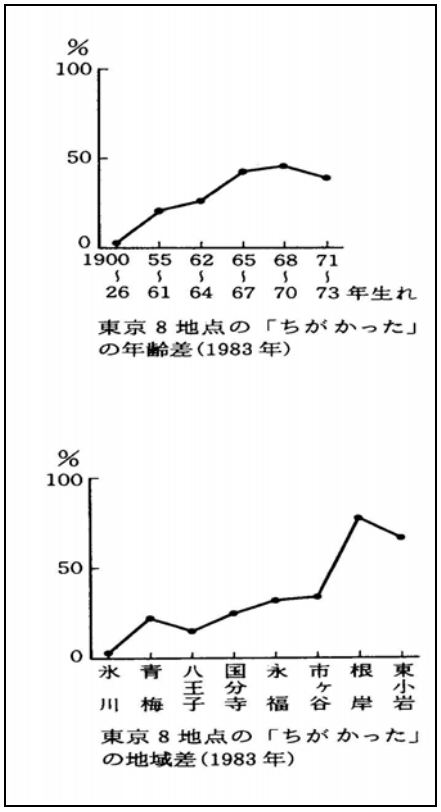
チガイは、動詞「違う」の意味内容が形容詞の範疇に近いことからその語幹を形容詞のように活用させることから生じた新方言である。チガカッタ、チガクナッタという連用形から始まりチゲー（チガイ）という終止形の発生に至る使用状況の推移は、新しい形容詞の誕生を示すと同時に、品詞・活用体系を整えようとする言語変化、並びに明晰化に向かう言語変化とみることができる。東京の若年層にも普及が認められ東京型の新方言と判断でき、全国的に普及しつつある。

【図１】は、チガカッタの使用率（1981 年・1992 年）を地点ごとに示したものである。横軸には高校生の出身中学校郡市等（郡市等の名称は調査当時のもの）が並ぶ（以下同様注 1)。1981 年当時、群馬県を中心とする北関東の西部において、チガカッタはそれほど使用されてはいないが、1992 年になると全域で使用が伸びている。特に伊勢崎市以東の東部地域における使用率の伸びは大きいことが確認できる。

【図 2】は、井上 1998 に示されている東京におけるチガカッタの使用状況である。上のグラフ（年齢差）から、東京においてチガカッタが若い世代で徐々に使用が伸びていることが見てとれる。下のグラフ（地域差）からは下町といわれる東京の東端で使用率が高いことが確認できる。井上 1998 の調査が 1983 年であることから、チガカッタは東京においても群馬県を中心とする北関東の西部においてもほぼ同時期に使用が認められ、東京型の新方言と考えられる。また、チガカッタの普及は、東京の方が北関東の西部より若干早いか、あるいはほぼ同時進行であるだろうことが予想される。



【図１】



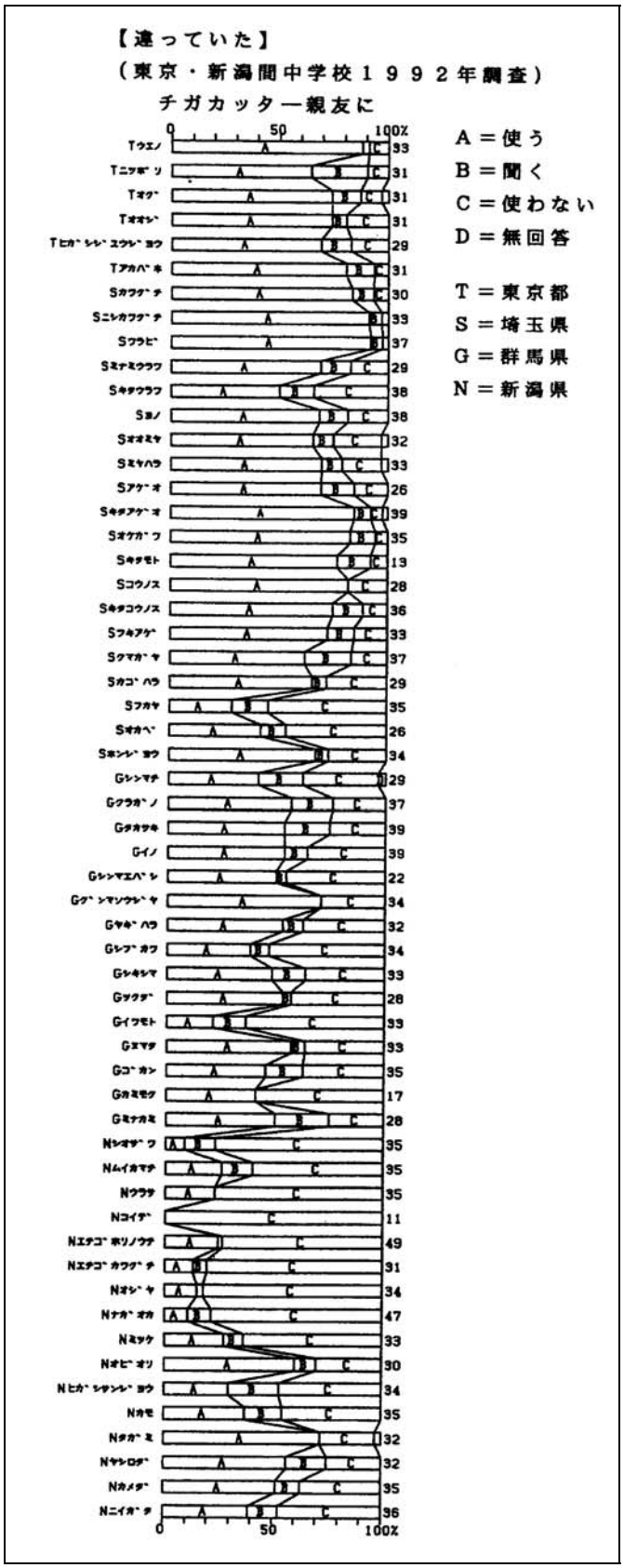
井上 1998 より

【図 2】

筆者は 1992 年の調査と並行して、東京・新潟間を走る JR 高崎線・上越線沿線の各駅に近い中学校においても新方言に関するアンケート調査を行った。【図３】は、その中学校調査結果（佐藤 1997b）のひとつである。1992 年調査当時、チガカッタは東京、埼玉の中学生にはかなりの使用が認められ、群馬県においてもほぼ半数の生徒に使用が確認できる。使用率の値を示すグラフ（A 使う＋B 聞く）は、東京から群馬・新潟の県境に向かって緩やかに下降しており、チガカッタが東京から地方へと普及していると読み取ることも可能である。

いずれにしても、1980 年代に東京・埼玉及び群馬を中心とする北関東の西部にチガカッタが若い世代に普及していったと認めることができる。

その後、チガクナッタ、チガクナイ、チガクテ、チガケレバ等、「違う」という動詞をまるで「チガイ」という形容詞のように活用させて使用する事例が数多く見受けられるようになった。筆者は 1993 年から 2000 年まで群馬県太田市内の小学校に勤務したが、



【図３】

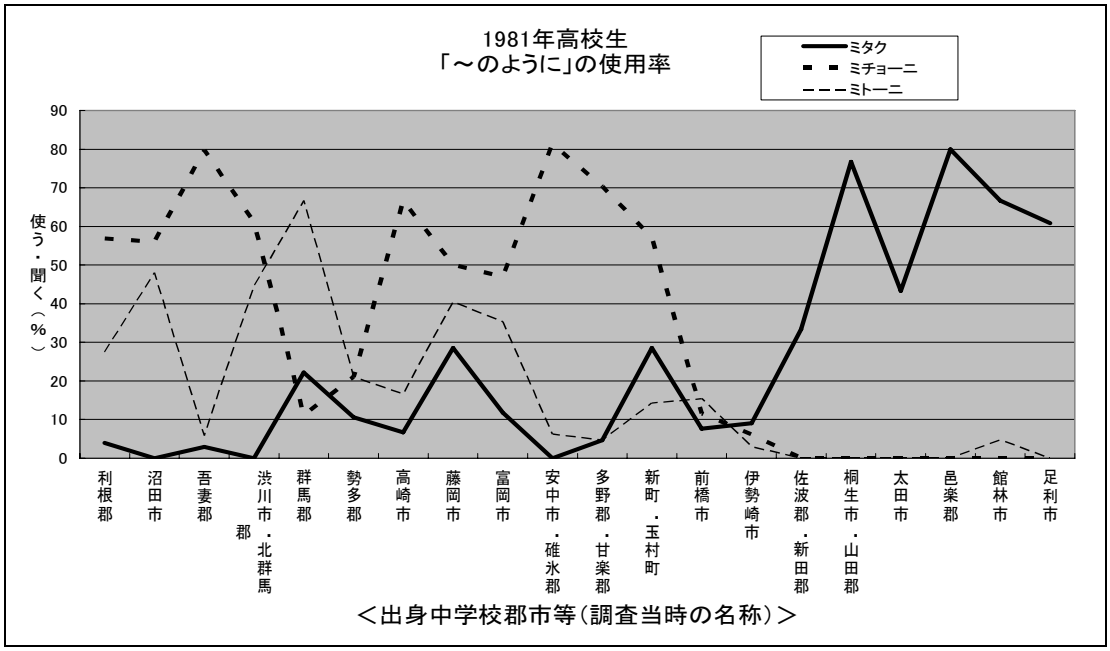
小学生が盛んに「チゲーよ」を使用するようになったのもこの頃である。チゲーは「チガイ」という新しい形容詞の終止形と考えられる。群馬方言においては連母音の融合が認められ、形容詞終止形末尾のアイはエーと発音されることから、「高い」はタケー、「早い」はハエーとなるように、チゲーもチガイが連母音の融合によって生じたものと考えられる。チガカッタによって始まった新しい形容詞への変化は、終止形チゲーの誕生により、完結へと向かったと見ることができ、品詞・活用体系を整えようとする言語変化と捉えられる。

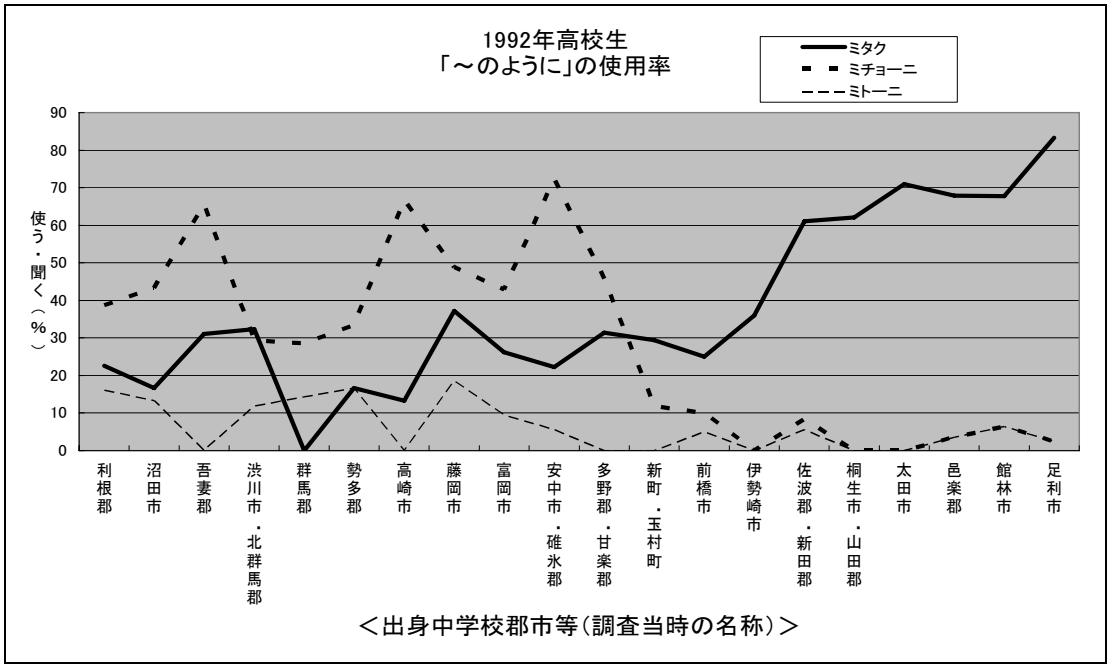
動詞「違う」から新しい形容詞「チガイ」への変化は、言語内的要因から考えることができる。本来、動詞は動作や動きを表す品詞であるが、「違う」は事物の性質や状態を表す単語であり、むしろ形容詞に極めて近い単語と言える。単語の意味内容が形容詞的であるにもかかわらず、活用は動詞として運用されていることの複雑さを解消する方法として、形容詞化する変化は、むしろ当然の変化であり、明晰化に向かう言語変化と捉えられるのである。

以上、東京型の新方言チガカッタに、日本語の言語変化の典型である品詞・活用体系を整えようとする言語変化や明晰化に向かう言語変化を認めることができることをみた。

５ ミタク

ミタクは、形容動詞「みたいだ」の語幹「みたい」を形容詞化した新方言である。群馬県内では東部地域から使用が始まり、西部・中部地域に既存のミチョーニ・ミトーニを凌ぐ勢いで広まっている。この動きは品詞・活用体系を整えようとする言語変化、言葉を単純化しようとする変化と捉えることができる。東京の若年層にも普及が認められ東京型の新方言と判断でき、全国的に普及しつつある。





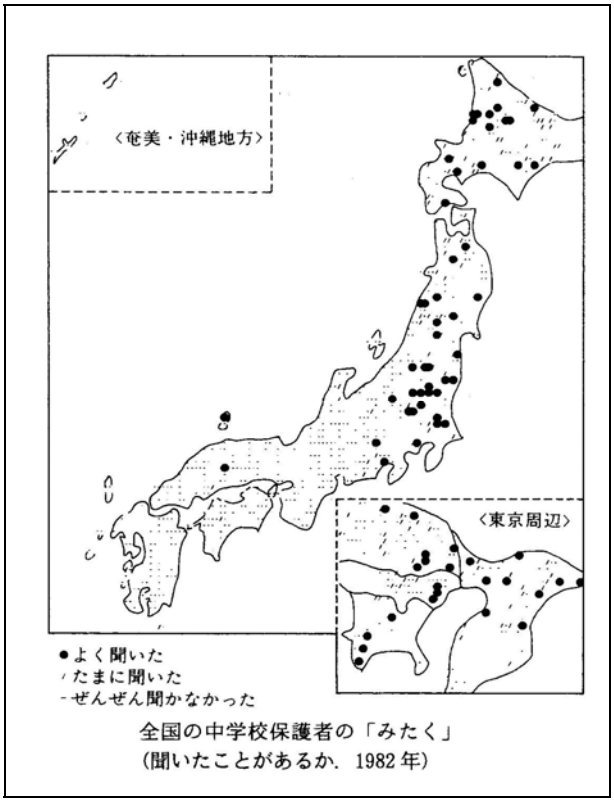
【図４】

【図４】は「～のように」の表現ミタク、ミチョーニ、ミトーニの使用率である。上のグラフが 1981 年、下のグラフが 1992 年調査の結果である（横軸の地点は【図１】に同じ）。

1981 年当時、北部・吾妻・西部・中部地域では、ミチョーニが最もよく使用されており、次いでミトーニが使われている。中部や西部では、ミタクがわずかながら使用が認められる。東部地域では、ミチョーニとミトーニは使用されず、ミタクがほとんどを占める。1992 年になると、北部・吾妻・西部・中部地域では、ミチョーニは若干使用率が下がっている地域があるものの依然として最もよく使用されている。しかし、ミトーニは多くの地点で 1981 年当時より使用率が落ちている。一方でミタクには使用率の伸びが認められる。東部地域では、相変わらずミチョーニとミトーニは使用されず、ミタクがさらに勢力を伸ばしていることが確認できる。

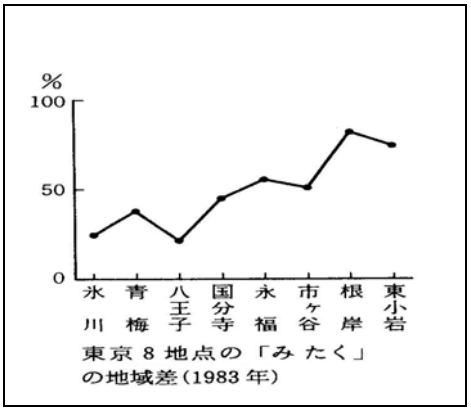
【図５】は、井上 1998 に示されている図で、1982 年の全国中学校調査において中学生の保護者から得られた回答（ミタクを聞いたことがある）を日本地図に示したものである。1980 年代前半の東日本で中年層でのミタクの使用が確認できる。井上 1998 では、東京でのミタクの使用について、下町経由で東北からの進入と想定している。

また、【図６】も井上 1998 に示されている図で、【図２】の下のグラフ（地域差）同様に、1983 年当時、若い世代の下町といわれる東京の東端でミタクの使用率が高いことが確認できる。



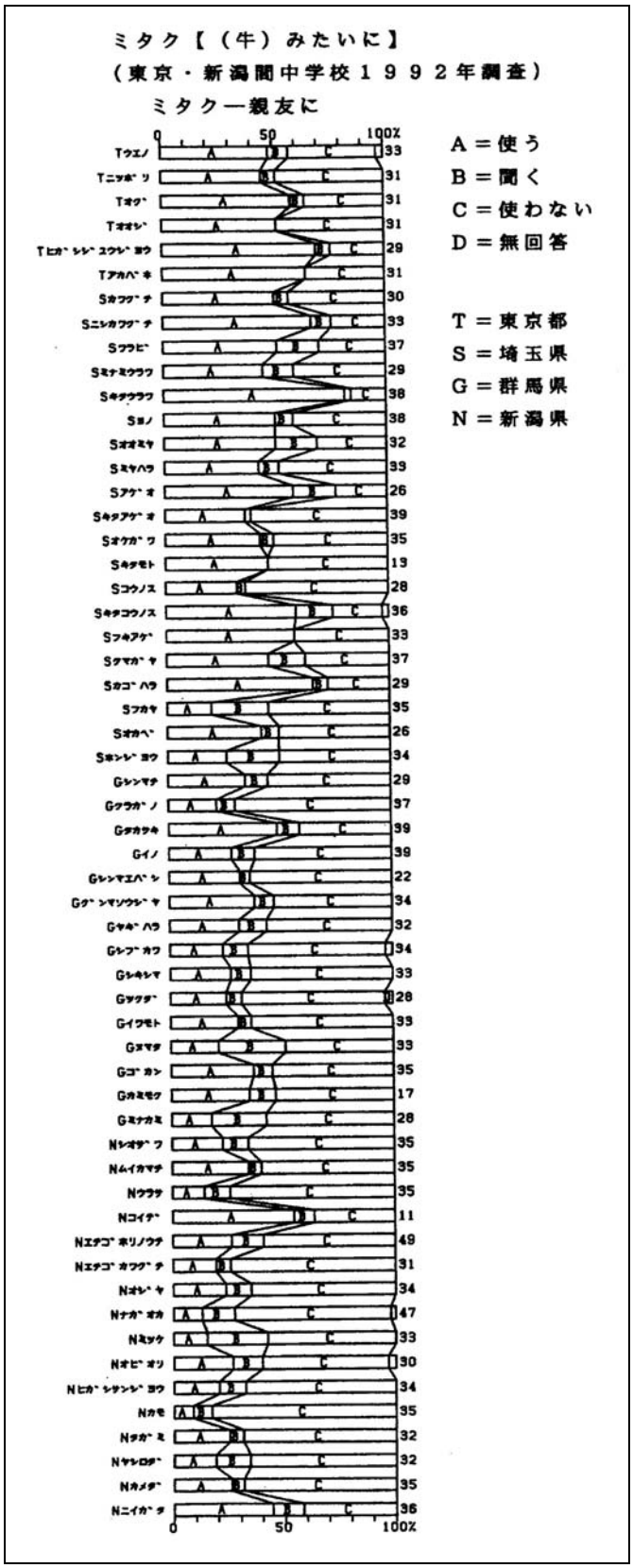
井上 1998 より

【図５】



井上 1998 より

【図６】



【図７】

【図７】は【図3】と同様に佐藤1997bに示したグラフのうちの1枚である。1992 年に JR 高崎線・上越線沿線の各駅に近い中学校におけるミタクの使用状況を示している。

1992 年調査当時、東京、埼玉の中学生にはかなりの使用が認められ、群馬においても使用が確認できる。東京型の新方言と認められる。

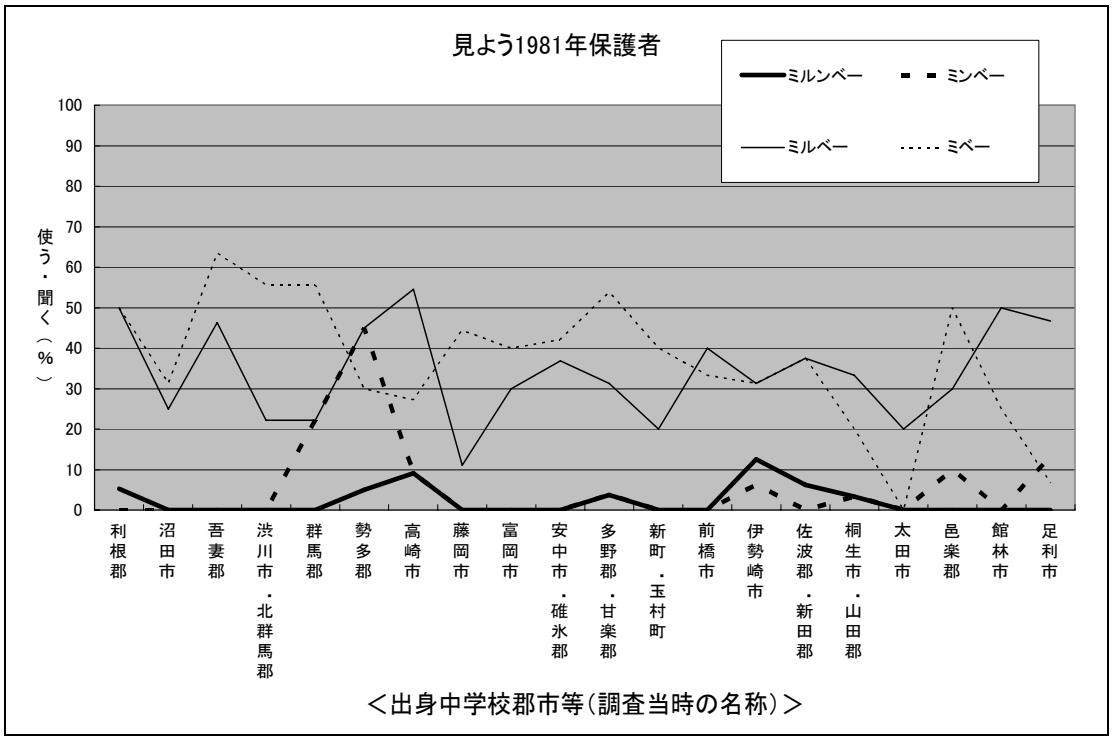
ミタクは、形容動詞「みたいだ」の語幹「みたい」を形容詞のように活用させて、その連用形「ミタクなる」「ミタクない」から生じたと考えられる。形容動詞の終止形から「だ」を省略する動きは単純化に向かう変化であり、語幹「みたい」を形容詞化し連用形として活用させていく動きは、品詞・活用体系を整えようとする言語変化であると捉えることができる。

以上、東京型の新方言ミタクに、日本語の言語変化の典型である単純化や品詞・活用体系を整えようとする言語変化を認めることができることをみた。

６ ンベー

意志・勧誘を表す助動詞のいわゆる関東ベーは、群馬県内で独自にンベーという形式で助詞化し若年層から使用されるようになった。東京では使用されず、地方型の新方言と判断できる。ンベーは、動詞の未然形接続から終止形接続へという接続の単純化、ル語尾動詞のルの撥音化という発音の簡略化及び撥音を多用する群馬方言の音声的特徴を受け継ぐ変化から生じたと考えられる。

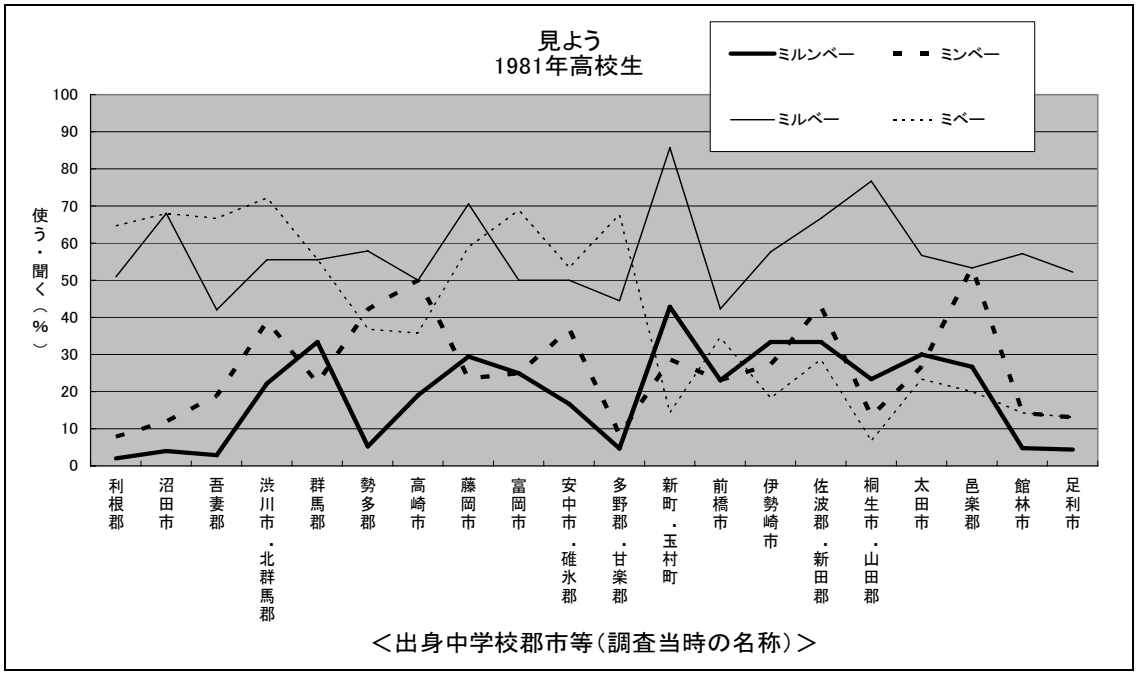
新方言ンベーの発生について、一段活用動詞「見る」を例にベー（勧誘）の接続の変化をみてみる。【図８】は 1981 年調査「見よう」について、高校生の保護者の調査結果で、群馬県内の中年層の実態と考えられる。ミベーに次いでミルベーがよく使用されている。ミンベーとミルンベーはほとんど使用が認められない。1981 年当時、中年層ではンベーはほとんど使用されていなかったと考えられる。

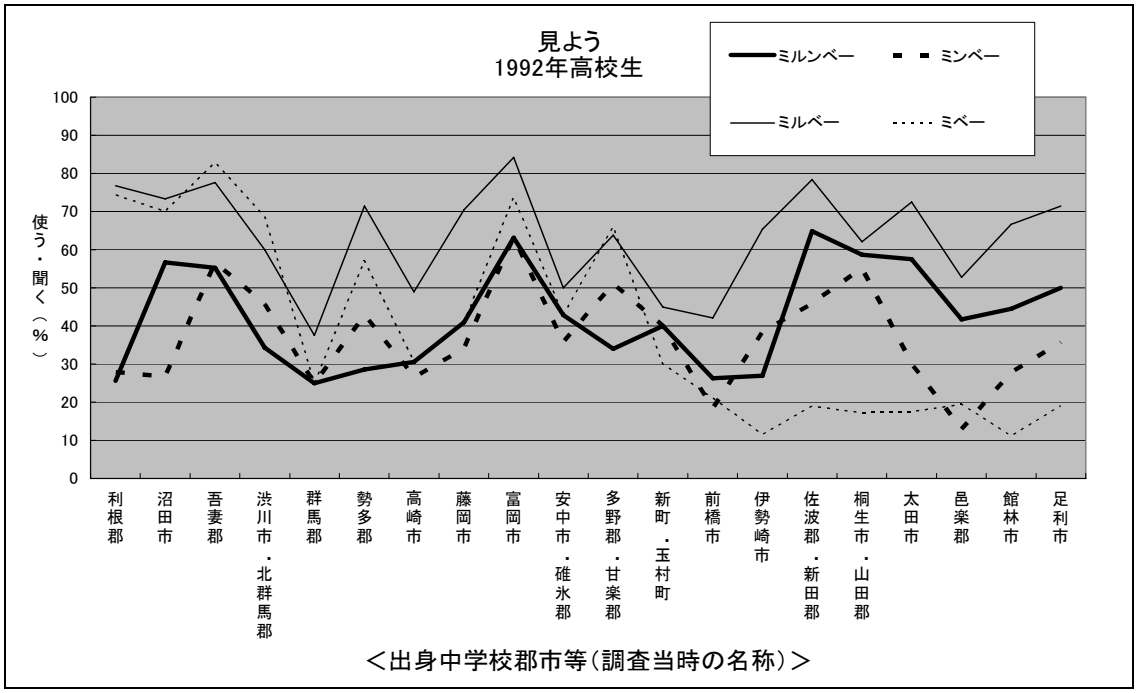


【図８】

【図９】は高校生の「見よう」（勧誘）について 1981 年調査と 1992 年調査の結果を上下に並べたものである。1981 年調査（【図９】の上）を【図 8】の保護者と比較してみると、群馬県内において保護者と同様にミベーとミルベーが有力であり、保護者に比べミルベーがミベーより勢力を増しているように見える。また、全域でミンベーとミルンベーがかなり使用されていることが確認できる。特に、前橋市以東の地域では、保護者層で圧倒的優位にあったミベーの勢力が弱まる一方、新勢力のミンベーとミルンベーの使用率が伸び、3

者が混在して使用されている様子が読み取れる。次に 1992 年調査（【図９】の下）をみると、群馬県全域でミンベーとミルンベーの使用率がさらに伸び、ミベー・ミルベーと合わせて 4 者の使用率が拮抗している。前橋市以東では、ミベーの勢力がすっかり衰え、ミルベーとミルンベー・ミンベーの 3 者が併用されている。以上のことから、高校生では 1981 年から 1992 年の間に、ミルンベーとミンベーの使用が伸びた、つまり、両者が新方言であることが確認できる。

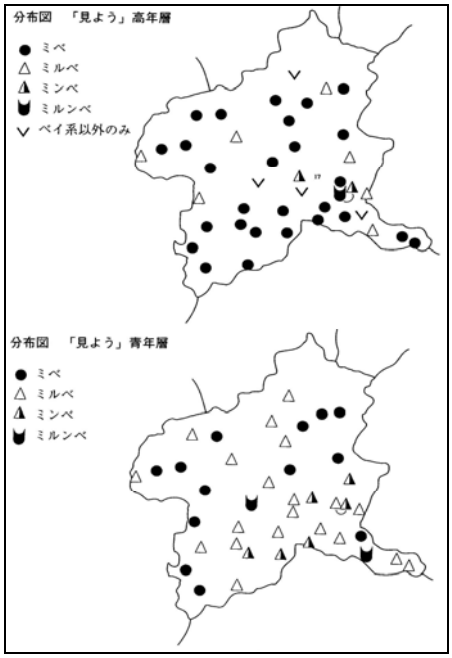




【図９】

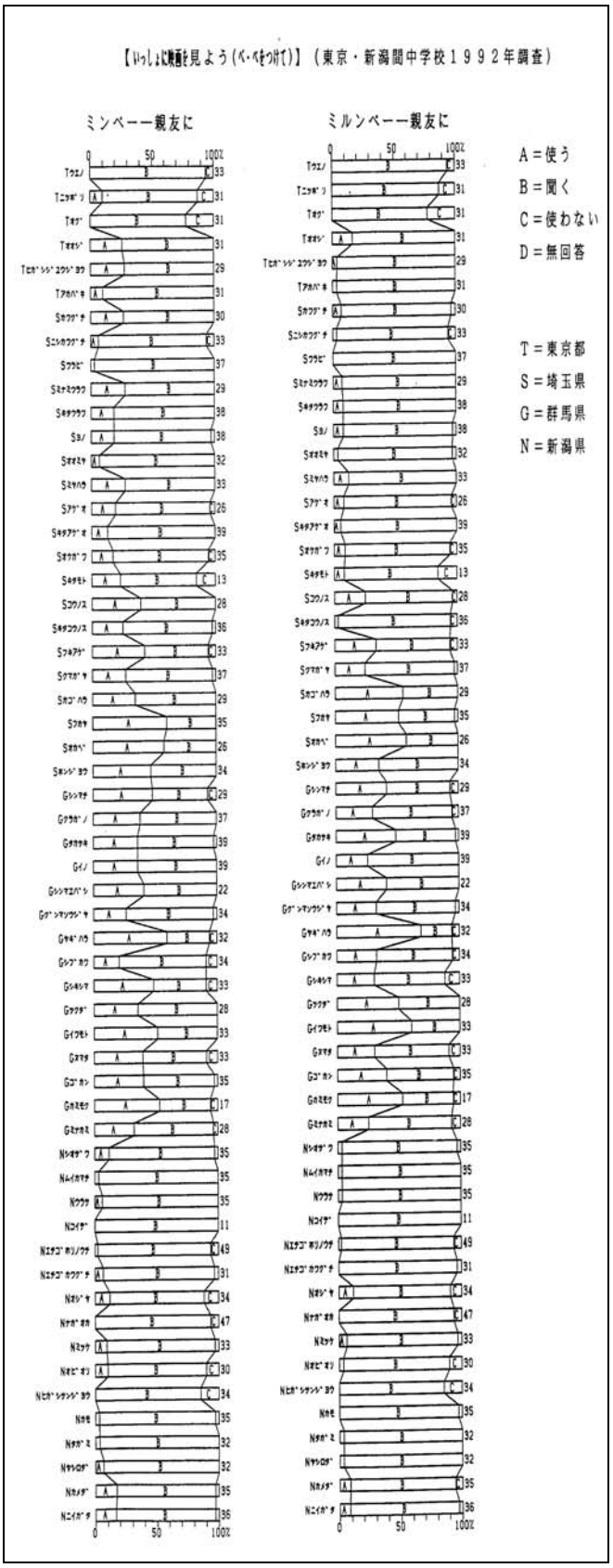
なお、「見る」＋ンベーが 1980 年代前半において、群馬県の若年層に使用が伸びていることは他の調査からも確認できる。【図 10】は本間芳枝氏による 1983 年調査の結果である（篠木 1999）。1983 年当時、ミンベ及びミルンベが東部地域を中心に若年層（青年層）で使用されていることが確認できる。

【図 11】は、佐藤 1997b に示したグラフである。1992 年に JR 高崎線・上越線沿線の各駅に近い中学校におけるミンベー・ミルンベーの使用状況を示している。1992 年調査当時、両者は東京では使用が認められず、群馬及び埼玉北部の中学生にのみ使用が認められ、地方型の新方言であることが確認できる。



篠木 1999 より

【図 10】



【図 11】

以上、地方型の新方言ミンベー・ミルンベー（「見る＋ベー（勧誘）」）の使用状況を見てきたが、これらから群馬県における「見る＋ベー（勧誘）」の変化の様相を次のように捉えることができる。

ミベー → ミルベー → ミンベー
↓ ↓
└ → → ミルンベー

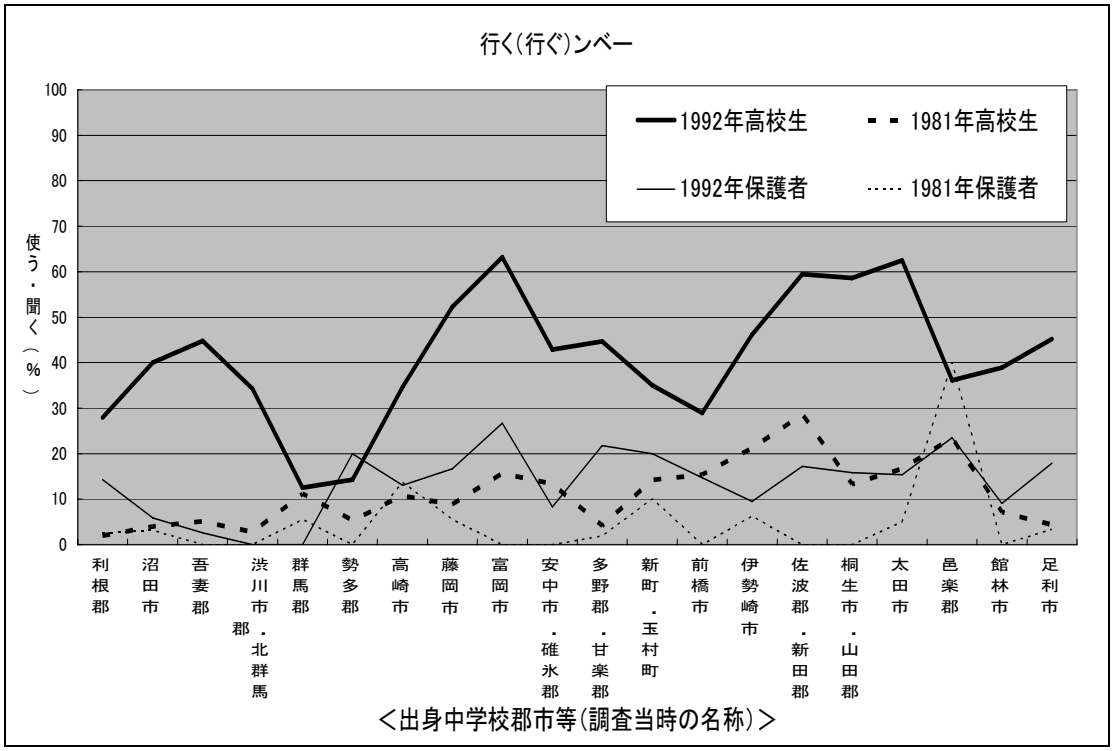
ミベーは、群馬県において「見る」の未然形にベーの接続する一般的な形式である。ミルベーは、1981 年調査の中年層ですでに使用が認められるが、ベーが動詞「見る」に接続するとき動詞の終止形に直接接続する接続の単純化により生じたと考えられる。これは、ベーの終助詞化をも意味する。ミンベーは、ミルンベーとともに 1981 年調査の若年層から使用が認められ始めるが、接続の単純化及び終助詞化によって生じたミルベーの「見る」の語尾ルが撥音化して生じたと考えられる。「見る」の語尾ルの撥音化は発音の簡略化による変化であるとともに、その背景には撥音を多用する群馬方言の音声的特徴がある。ミルンベーは、撥音を多用する群馬方言の音声的特徴の影響を受け、ミンベーからンベーのみが独立し新たな終助詞となり再び「見る」の終止形に接続し生じたと考えられる。ミンベー、ミルンベーともに撥音を多用する群馬方言の音声的特徴を受け継ぐ変化といえる。なお、使用率の推移からみるとミルンベーよりミンベーが先に広まったと考えられるが、【図９】の下の図から分かるように、1992 年の段階ではミベー・ミルベー・ミンベー・ミルンベーが混在する中で、ミルンベーが先なのかミンベーが先なのか、鶏と卵の関係のように判然としないまま、両者は広まっていったと考えられる。

ここで撥音を多用する群馬方言の音声的特徴とンベーとの関係について述べる。古瀬 1997 には群馬方言の音声的特徴の一つとして撥音化があげられており、表にまとめると次のようになる。

撥音化の現象	具体例
／N／音の直前のラ行音	スンナ（為るな）、クンナ（来るな）、ミンナ（見るな）、トンネー（取らない）
格助詞「の」、形態素「者・物」の「ノ」	コドモンモン（子供の物）、キモン（着物）
［n］音の直前の格助詞「に」	カワンナル（川になる）、アメンナル（雨になる）、ハタケンナル（畑になる）
ナ・マ行音が後続する語頭のウ音	ンマ（馬）、ンメー（おいしい）、ンーント（たいへん・とっても・たくさん）
［n］・［m］・［b］の直前に添加	オンナシ（同じ）、アンマリ（あまり）＜中央部では「アンマシ」＞、タンビニ（度ごとに）

これらの多様な撥音化現象に加え、ンベーの誕生に影響を与えたと考えられる撥音化は、終助詞「の」の撥音化である。状況や事情を説明する際、主に文末で「行くン（さ)」「見るン（さ)」「食べるン（さ)」等、動詞の終止形に接続する「ン」がそれである。また、疑問を表す場合も動詞の終止形について「行くン？」「見るン？」「食べるン？」等となる。さらには、相づちとしてよく使われ群馬方言の代表的表現としてしばしば紹介される「そうなン」などもこの撥音化に当たる。文末に現れるこの撥音化が終助詞となったベーと結びつくことによりンベーは新しい終助詞として誕生したと考えられるのである。なお、篠木 1999 では、「ンベに含まれる撥音ンは群馬県人にとってはきわめて懐かしい響きをもつ音声であるように思われてなりません」とあり、群馬方言の音声的特徴である撥音化と新方言ンベーとの関係について示唆している。

「見る＋ベー（勧誘)」でンベーの発生をみてきたが、ここで「行く＋ベー＝イクンベー」の様相を見てみる。【図 12】は、1981 年調査と 1992 年調査の高校生とその保護者の行クンベーの使用率を比較したグラフである。まず、中年層である保護者をみると、1981 年は邑楽郡で使用が見られるものの使用はほとんど認められず、1992 年になると全域で若干使用され始めていることがわかる。高校生は、1981 年当時、1992 年の保護者と同じような状況であったものが、1992 年になると急激に使用率を伸ばしていることが確認できる。「見る＋ベー（勧誘)」の様相に酷似している。「見る＋ベー（勧誘)」での一連の変化と同様のことがル語尾動詞ではない普通動詞にも起こったと考えられよう。



【図 12】

７ まとめ

群馬県の新方言を例に、若年層で使用が認められる新方言には日本語の言語変化の典型やその地方独自の方言的特徴を継承する言語変化が認められることを述べた。

東京型の新方言チガイでは、品詞・活用体系を整えようとする言語変化、並びに明晰化に向かう言語変化をみた。同じく東京型の新方言ミタクでは、品詞・活用体系を整えようとする言語変化、言葉を単純化しようとする変化をみた。地方型の新方言ンベーでは、接続の単純化及び発音の簡略化をみた上で、撥音化を群馬方言の音声的特徴を受け継ぐ変化と捉えた。

三例が示すように新方言には日本語の言語変化の典型を認めることができる。また、ンベーが示すように地方型の新方言の中にはその地方独自の方言的特徴を継承する言語変化が認められる。地方型の新方言には地方の方言が元来保持する底力のような伝統方言を受け継ぎながら発生したり、変化したりする新方言があると考えられる。地方の若い世代が在来の方言には飽きたらず新しいことばを生み出そうとするとき、元々ある伝統方言を自然に受け継いでいるのである。新方言の典型はまさにここにあるのではないだろうか。

８ おわりに

本論文は、新方言が日本語の言語変化を考察する上での貴重な「生」の資料であることの証明でもある。しかし、本論文で使用した筆者の資料は 1981 年調査と 1992 年調査であり、過去のデータという印象は否めない。初回調査以降 10 年間隔で調査を計画していたが、2002 年前後での調査の機会を逸してしまった。現在、初回調査後 30 年前後での調査を計画中である。調査を実現し丁寧かつ迅速な報告を心がけたい。

調査にご協力いただいた皆様に心より感謝申し上げる。

注１

利根郡、沼田市	北部地域
吾妻郡	吾妻地域
渋川市・北群馬郡、群馬郡、勢多郡	中部地域
高崎市、藤岡市、富岡市、安中市・碓井郡、多野郡・甘楽郡	西部地域
新町・玉村町、前橋市、伊勢崎市	中部地域
佐波郡・新田郡、桐生市・山田郡、太田市、邑楽郡、館林市 栃木県足利市	東部地域

＊郡市等の名称は調査当時のもの。

参考文献

井上史雄 1997「現代方言のキーワード」『方言の現在』(明治書院)

井上史雄 1998『日本語ウォッチング』(岩波新書)

古瀬順一 1997『群馬県のことば』(明治書院)

佐藤髙司 1982「関東北部における「新方言」」『語学と文学』21 号(群馬大学)

佐藤髙司 1993a『《新方言》の動向―北関東西部における高校生のことばの研究―』私家版

佐藤髙司 1993b「新方言の使用における男女差―群馬（及び栃木の一部）の高校２年生のアンケート調査から―」『計量国語学』19 巻 1 号（計量国語学会）

佐藤髙司 1994「北関東西部における新方言の伝播の特徴」『語学と文学』30号(群馬大学)

佐藤髙司1996a「東京の新表現が地方に普及するときの社会的要因―前橋・高崎での新方言使用の比較から―」『上越教育大学国語研究』第10号（上越教育大学）

佐藤髙司1996b「東京 - 新潟間における新形容詞「違い」の普及の様相 ―口語レベルからの日本語の変化過程モデル―」『語学と文学』32号(群馬大学)

佐藤髙司1997a「「～のように」にみる新方言の接触 ―東京・新潟間及び群馬県北部・西部におけるミタク・ミチョーニ・ミトーニ―」『語学と文学』33号(群馬大学)

佐藤髙司1997b『関東及び新潟地域における新表現の社会言語学的研究』(文部省科学研究費研究成果報告書)

篠木れい子 1999『群馬の方言― 方言と方言研究の魅力― 』(上毛新聞社)